
国際健康開発 IHD

特定非営利活動法人(NPO)会報 7号 2012年2月

非特定営利団体国際健康開発会員ならびに
このNPOに関心をお持ちの皆様へ

牛島廣治
「国際健康開発」理事長

1. 2012年の活動にむけてと、2. 先日
ユアサ研究助成に提出した「過去にいた
いた助成に対する報告」を掲載させてい
だきます。

1. 2012の活動に向けて

2011年は長い歴史の1年としては様々な
ことが起こりました。わが国では東北の地
震・津波災害と福島での原発事故があり、
世界ではアラブ諸国の政権交代、ヨーロッ
パの経済危機がありました。これらの終息
には2012年にも続きますし、原発事故のよ
うにもっと長く続くものもあります。このNPO
も災害への支援、特にノロウイルスの診断
キットの無料配給の準備をしたのですが、
幸いにも配給に至りませんでした。

このNPOの支援としての研究の場所を日
本大学に移動して1年経過しました。研究
の方も少しずつ進んでいます。まだそ
の多くは分子疫学ですが、出来れば基礎的
研究が加わればもっと充実した方向に進む
かもしれないと思っています。現在の研究
者の人数では分子疫学を主体とせざるを得
ないところがあり得ますが前向きに研究の
方向を検討したいと思っています。

Tranさん、Aksaraさんが現在、修士2年
生として研究を進めておりますが修士の期
間は残り少なくなりました。Tranさんはベ
トナムホーチミン市の小児呼吸器疾患入院
患児の分子疫学的手法によるウイルス診断
と臨床所見についてであり、Aksaraさんは
2009-2011年の我が国における下痢症ウイ
ルスの分子疫学的診断であり、それぞれ頑
張っております。博士課程に進学した場合
には、これらの研究をさらに進めるととも
に、新しい基礎的な研究を進めることにな
ります。

2011年は私たちの研究に協力いただい
ているイムノプローブ社からは、ノロウイル
ス診断キットの改訂版が出たことと、念願
のロタウイルス、アデノウイルス、ノロウ
イルスの同時診断キットが出ました。また、
ノロウイルスワクチン開発研究のための動
物実験を行ってもらっています。2012年は、
サポウイルス、アストロウイルス、風疹ウ
イルスの抗原検出キットの改良を進めてい
ただくことになります。

今までお付き合いがあった大学院生たち
が一部はアジアの国に帰ってそれぞれ要所
で働いております。2012年には、それらの
元学生さんたちと共通な話題で小規模でも
シンポジウムなどが行えたらと思います。
従来行ってきた感染症や疫学が中心となる
と思います。

2. ユアサ研究助成への報告書

私は「アジアにおける少数民族の母子の健康に関する研究」で平成 13 年に研究助成をいただきました。

(1) 中国雲南省での少数民族乳幼児の介入型保健研究を 10 年間行い、指導が地域に根付いてビタミン B 1 欠乏症の低下に繋がっています。また鉛中毒に関しては、地域の環境、食器、装飾品などに問題があることがわかり、改善の必要性を省に伝えました。HIV の母子感染について雲南省の少数民族を含めた地域での母子感染予防計画を作りました。現在、検査を受ける妊婦、治療薬を服用する HIV 感染妊婦数も増え HIV 感染児は減少しました。共同研究者の李燕氏は現在昆明医科大学副学長であり、同研究を続けています。

(2) ベトナム北部での少数民族の母子保健については、保健婦による妊娠中の指導・教育が新生児期の死亡の減少および栄養状態の改善に関係していることがわかりました。共同研究者の Hien Tranh 氏は、現在ベトナムユニセフ職員として同国の HIV 母子感染予防対策を行っています。

(3) ラオスでの研究は、この国で予防接種が定期接種としてされてない風疹、先天性風疹症候群の疫学調査、抗体保有状況を調べました。共同研究者の Phengxay 氏は、現在ラオスの WHO で感染症の予防のため働いております。これらの共同研究者は私の教室で博士号を取得されました。

また、この研究を国内の少数民族社会である外国人の母子保健に目を向けて、「多民族文化社会における母子の健康」という厚生労働科学研究を行いました。これらの研究および報告は、ホームページで検索出来

ます。

私は、東京大学医学系研究科を退職後、鹿児島国際大学福祉社会研究科、藍野大学医療保健学部、そして現在日本大学医学部（客員教授）で働いております。東京大学時代にはアジアの色々な国の大学院生と研究をしてきました。母子保健とともに小児感染症も行っております。機会がありましたら皆様との交流を深め、少しでもお役に立てればと思います。

海外で学ぶとは

牛島恭子

昨夏、産経ニュースで「経団連、海外留学奨学金を創設 内向き志向に危機感」という記事を目にした。近年、若年層に内向き志向が広がり、就職活動の早期化・長期化もあって海外留学を避ける学生が増えている。経団連が奨学金制度を創設するのは、このままでは世界で通用する人材が払底し、日本が国際競争に勝ち残れなくなるとの危機感があるからだと言う。確かに、日本から海外への留学者数の推移は 2004 年をピークに減少しており、特に米国への留学者数は 2000 年前後をピークとして半減している。これは必ずしも若者の意識だけの問題ではなく、その背景として日本の経済状況の悪化や留学経験の評価の低さなどが考えられているが、内向き志向の若者を叱咤激励する意見が巷に溢れた。

その一方で、海外留学推進を危惧する声もある。英国によるインドの植民地支配にあるように、米国によって主権を握られている日本の現状をもたらしたのは政治や経

済、教育分野に多数占めている米国留学者であるというものだ。インドにおける英国の植民地支配の巧妙な方法の一つは、インドの優秀な青少年を本国・英国に留学させ、みっちりとして英国式の教育を施した上で、インドに帰国させ、インドの官僚や軍人として育成し、彼等を植民地支配の先兵として使う、つまり、英国人は姿を隠し、インド人によってインドを植民地支配するという方法だった(山崎行太郎)。海外で教育を受けるといことが欧米至上主義者になるというのであれば、それは大きな問題になるだろう。

海外で学ぶとは何だろうか。

私自身は 90 年代後半に英国に留学し、Genetics を学んできた。PCR の技術によって遺伝子工学が発展し始めたものの、日本では学ぶ環境に限られていたからだ。また、海外でいろいろな国の研究者と交流し、新しいことに挑戦してみたい気持ちも強かった。語学がそれほど堪能でない私には、英語で新しいことを学び、表現していくことは大変厳しいものとなったが、得たものも大きかった。それは、専門知識ではなく、多角的で柔軟な物事の捉え方というようなものだ。外からみた自国の良い点と悪い点を認識することに始まり、異文化による軋轢を乗り越え、様々な主義・主張を取り込みながら模索していく経験によって培われた何かである。

海外で学んだことを模倣するのが目的ではない。身体的にも精神的にも柔軟性を持った時期に、母国語ではない言語を使って異文化の中で過ごすことそれ自体が、あらゆる国の若者が自国を将来担う上で大きな意味を持つと信じている。

NP0 と多民族文化社会における母子の健康

紀 瑞成

現代世界は、グローバル化・高度情報化の進展により、経済格差や社会生活などの面で大きな変革期の渦中にある。豊かで活力のある多文化共生社会には、民族などの異なる人々は、互いの文化的違いを認め、それぞれの文化的アイデンティティを否定されることなく、社会に参加することを通じて、共感できる関係をつくり、共に生きている。多民族文化社会における母子の健康においても、その多様性を受け入れ、弱者に手をさしのべることで、母子保健分野で活躍する多くの特定非営利活動法人は、保健医療の仕組みづくりと人づくりを通じて、世界の人びとが自らの健康を守ることができる社会を実現したいと考え、世界各地で活動している。特に、母子保健事業（予防接種や健康診査など）で、妊娠と出産に係わる疾病と事故から母子の健康と命を守り、小児癌経験者の QOL 向上支援や子宮頸癌患者支援と子宮がん検診呼びかけのシンボルなどを取り上げられる。

ここで、母子保健事業の分野で、最も活躍している国境なき医師団をご紹介します。国境なき医師団（仏：Médecins Sans Frontières、MSF）は、1971 年にフランス人医師たちを中心に設立された NP0 である。国境なき医師団は貧困地域や第三世界、紛争地域を中心に、年間約 4,700 人の医療スタッフが異文化の環境に適応し、世界各地 70 ヶ国以上で活動している。現場のニーズに対応した活動を行う、極めて高い柔軟性と適応力が求められる。災害や紛争に際し、

どこよりも早く現地入りする緊急医療援助を得意とし、マラリアのような地域特有の疾病の撲滅にも力を入れている。チェチェンやコソボ住民のような公式な代表のいない人々に代わり、非人道的行為を国際社会に対し告発している。時には国連の手法を非難することもあるが、実際には活動現場で国連や他 NGO と連携していることが多い。メディアなどを通し、現地で見えてきたことを伝える「証言活動」も重要な活動の 1 つと位置づけている。

医療を必要としている人びとに診察と治療の機会を提供することは MSF の最も基本的な活動だが、予防接種や母子保健も主要な活動である。体力を失った人びとが密集して暮らす難民キャンプなどで、大規模な集団予防接種を実施している。エイズや結核、コレラ、マラリアによって世界では毎年数百万人が命を落としている。はしかや髄膜炎など予防可能な伝染病の大流行によって多くの命が奪われるのを防ぐためには、膨大な事前準備を要するものの、この活動は非常に重要な意味を持つと思う。また、緊急事態の際、最も弱い立場におかれるのが女性と子どもである。MSF は母子のための周産期ケア、栄養治療、予防接種、性感感染症治療に力を入れている。日本人も多く活躍しており、東北地方太平洋沖地震では、翌日に現地入りし医療救援活動を行っている。

全ての人が医療を受ける権利があり、また医療の必要性は国境よりも重要だという信念に基づき、国際援助分野における功績によって、1999 年にノーベル平和賞を受賞した。

インドネシアでの人との出会い

江下優樹

yeshita@oita-u.ac.jp

「国際健康開発」の会報 5 号で、「タイでの人との出会い」について書かせていただきました。今回は、インドネシア国での人との出会いについて書かせていただきます。

インドネシアについての私の数少ない知識といえば、東京に住んでいた 25 年前に、新宿西口にある三角ビルの近くの広場でケチャダンスを初めて見たことです。今でもその情景が眼に焼き付いています。上半身裸の民族衣装を着た若き男性達が円陣を組み、その中央に民族衣装で豪華に着飾ったうら若き一人の女性に向かって、神を崇拝するように両手を挙げ、時々手のひらをひらひらと激しくふるわせ、チャ、チャ（と聞こえました）と声を出し、一斉にその声が止んで静まりかえるのは、みんなの呼吸が一つに調和したダンスだと思いました。インドネシアのバリ島での踊りと説明されたので、その頃の私にとっては遠い国の存在でした。

今から約 3 年前、ひょんなきっかけでインドネシアを訪問する機会が出来ました。職場での休憩時間にお茶を飲んでいたときに、一本の電話を受けました。T 大の研究所で寄生原虫の研究をされている W 先生からでした。この電話を受けるまで、W 先生とお話をしたことはありませんでしたが、学会でなんどかすれ違った際にお会いしたくらいでした。

内容は、共同研究に参加しないかとのお願いでした。30 分くらい電話で話している

内に、何でも興味をもつ私ですので、マラリアの共同研究を承諾してしまいました。私は今までに、蚊が媒介するフィラリア病やウイルス病の研究をおこなってきたのですが、マラリアに関しては琉球列島のマラリアの疫学史を研究した程度でした。W 先生の話では原虫を媒介する蚊の領域で共同研究に参画を私に希望されました。また、関連の共同研究として、その年に新学術研究の申請書を準備することになり媒介蚊部門の担当者としても参加することになりました。この申請では、残念ながら一次審査を通過することが出来ませんでした。この申請書の準備をとおして、はからずも私はW先生から大型の研究費を獲得するための申請書の書き方を学ぶことが出来ました。W 先生はいろんな所に研究費の申請をしておられまして、既に獲得している大型の研究予算でインドネシアのマラリアプロジェクトを動かされていました。W先生と会ったことからインドネシアの研究者と会う縁ができたわけです。

実は、私の職場にW先生が電話された後、1週間ほどして私の職場に施設見学に来られました。私の研究環境を視察に来られたようです。蚊の飼育設備や研究のための特殊施設を見学された後に、大分大学にしかない環境だとほめてくださいました。これがきっかけとなり、前述の研究費申請に参加することとなり、またインドネシアでのマラリアプロジェクトに参加するきっかけとなったわけです。

このインドネシアプロジェクトは3年目に相当する2010年度で一応の終結となったのですが、共同研究は続けています。プロジェクトを強力に進めるために、研究費

の申請をおこなっているところです。このプロジェクトは極めてユニークなメンバーで構成されていました。マラリア原虫のゲノム解析を行うために、寄生虫学者、衛生動物学者、若手のバイオインフォマティクス専門の学者、分子生物学者、保健衛生を専門とする方など、多分野の専門家がマラリアの謎を解くために集まりました。

インドネシアのマラリアプロジェクトは、スラベシ島の北にあるマナドを舞台に展開されました。海が綺麗なので、スキューバダイビングのメッカにもなっています。福岡国際空港からのマナドへの直行便がないので、シンガポールのチャンギ国際空港内にあるトランジットルームで仮眠して翌日の朝にマナドへ旅発つのが一番疲れのない旅のようでした。マナド国際空港に到着すると、S 大学医学部寄生虫学教室から J 先生と学生さん達が出迎えてくれました。

マナドは、大分県の別府市のように、山が海にせまっけていて、海側に道路が走り、家は海岸から山にかけてのスロープのところに建てられている景色でした。漁業が盛んなので魚料理が大変に美味でした。初めてのマナドでしたので、W 先生の後ろからついて行く感じで日程をこなしました。バイオインフォマティクスが専門の若手の先生によって、大学内にあるインターネットカフェでのバイオインフォマティクスのワークショップが開催されました。このような内容は、私にも初めての分野なので、参加しました。インドネシアの若い医学生さん達が熱心に聞き入っていたのが印象的でした。

滞在中は、研究用のマラリアサンプルを集めるために、協力病院を訪問しました。

また、マラリア媒介蚊を採集するために、マラリアの流行地が実家である S 大学の J 先生の家で車で訪問して、学生さんに蚊の取り方などを現地指導しました。

インドネシアの J 先生は、私のことを「先生」と日本語で話すので不思議だなと思っていました。実は、私たちのチームに当初から参画されている日本人女性の I 先生から日本語を学んでいました。I 先生は、インドネシア語が堪能で、JICA から派遣されてマナドで日本語を教えていた経験があります。その後、I 先生はマナドの文化に魅せられていろんな形でインドネシアとくにマナドと関わりを続けられていたことがわかりました。私達のプロジェクトチームがマナドを訪問する前から、既に研究の下地ができあがっていたのだと思っています。

インドネシアの旅は、一回の訪問で終わりかなと思っていました。しかし、マラリア以外にもマナドには蚊が媒介するデング熱やチクングニア熱があることを現地訪問で知りました。現地研究者からの要請もあって、デング熱のワークショップをマナドで行う事になりました（写真1）。セミナー後には蚊からデングウイルスのゲノムを RT-PCR 法で検出する方法を、実際に行ってもらいました（写真2）。日本からウイルスは持参出来ませんので、精製した RNA のみを持参して実習を行いました。参加者の中にはピペットを初めて使う方も多く、操作に慣れるのに時間がかかりました。しかし、1 日半の実習の終了後は皆さん充実した顔をされていました。

マナドのデング熱患者がどれ位発生しているのかという情報を私は全く知らなかったのですが、臨床症状からデング熱と判

断される症例がマナドでもかなりあるという情報を、このワークショップに参加されていた小児科の先生から知ることが出来ました。



写真1 デング熱のワークショップ
(2009年5月20日 S大学医学部寄生虫学教室にて)



写真2 デングウイルスのゲノムを PCR 装置で増幅後、ピペットマンで試験液をアガロースゲルに加えて電気泳動を行う写真
(2009年5月21日 S大学医学部寄生虫学教室の実験室)

その後、2010年5月には、マラリアを材料としたゲノム解析に関するシンポジウムがマナドであり、私も参加させていただき

ました。実は、W 先生は同年 3 月にお亡くなりになられ、このシンポジウムには参加することができませんでした。プロジェクトを牽引されていた先生のお一人でしたので、極めて残念に思いました。また、インドネシアの J 先生はじめ多くの S 大学関係者の方からも惜しまれました。W 先生が築きあげられた両国間の研究者の絆を今後とも維持しながら更に深めていきたいと思っています。

W 先生は、私が一人で研究をしていることを察して、マナドの S 大学医学部出身の優秀な国費留学生を推薦して下さいました。現在、大分大学医学系研究科の博士課程 1 年生として研究しています。L 君は、大分大学医学部にあるワンダーフォーゲル部に所属して休みの日は山登り、また最近は日本の精神文化を学ぶために弓道部に入部して、昨年の 10 月に見事弓道一級の試験に合格しました。日本滞在の 5 年間に日本で医学博士号を取得することのみならず、日本の文化も学でほしいと思っています。L 君の総合英語力は極めて高いです。また、日本語の勉強は週 1 回、大分大学の日本語専門の先生から中級クラスで日本語を学んでいます。ときどき私も迷うような日本語の文法の質問を日本語でされるので、私のほうが冷や汗をかきます。若いこともあっていろんな事に挑戦してくれています。また、大分と東京間での週 1 回の Skype ビデオ会議による研究打合せでは、若手のバイオフィンフォマティクス専門家である K 先生と研究討論をしています。L 君がマナドに戻る頃には、研究者を含むいろんな分野の日本人と友達になっているように想像します。博士課程の L 君が一人前の研究・教育者に

なるころに、再度マナドを訪問出来ればと思っています。

あとがき

昨年 3 月 11 日の東日本大震災から早くも 1 年が経過しようとしています。復興庁の発足に伴い、現地事務所・支所も設置されました。縦割り行政からの一元化が求められていましたので、今後は速やかな対応が期待されます。

特定非営利活動法人(NPO) 国際健康開発会報の 7 号を発行することが出来ましてホッとしています。原稿を投稿して下さいました、皆様にお礼申し上げます。本会報は、ウェブでも (<http://square.umin.ac.jp/boshiken/>) 閲覧出来ます。多くの皆様にご一読願えれば幸いです。

「国際健康開発」理事長の牛島廣治先生力作のハガキ絵(水彩画)です。一日も早い復旧・復興を願っています。(YE)



北国の春（その１）

赤べこ（福島県会津地方の郷土玩具。「べこ」は東北地方の方言で牛の意味）が黒い涙を流しながら早春の草を食べているところ。遠くに薄く原発の建物を入れています。



北国の春（その２）

牛が蓮華を食べ菜の花、桜が咲いています。被災地にも春が来ました。